【エッセイ】
命

前川　美和

時期的に少し早いかなと思いつつ、根来のもみじ谷を訪れた。暗闇の中に家族連れやカップルが大勢集まっている気配がする。

「あっ、いた」ポッと浮かぶ少し黄味がかった光ははじめは、いつも幻覚かなと疑うが、いくつもの光があちらこちらで点いたり消えたりしながら漂うのを見るとその存在を確信する。

今年は二才の芙生子もいっしょだ。闇を怖がって「もう、おしまい」「もう、おうちにかえる」と駄々をこねるのをなだめながら進む。飛んでいるのは呼吸を合わせているかのように点滅を繰り返し、動かないで木の葉や地面の草の影に潜んでいるのは控えめに瞬いている。

人懐っこいのが一匹、芙生子のズボンのポケットに留まった。黒い体に柿色の頭、意外に大きい。昔、父が籠に入れて持って帰ってきてくれたのは小さくてはかなげだったが、ここで見るのは丸々して強そうだ。飛び交う光に誘われて、奥へ進んでいく。

去年もここで夫と二人で見ていた。去年は婿と別居した娘もまだ家庭をもっていたから。小雨が降っていて、足元が悪い中、二人で上へ上へ、奥へ奥へと進んで行って、人のまばらな闇の中で静かに飛び交うホタルを見ていた。ＰＥＴ検査で取り込みがたくさん見つかり、再発が告げられた直後だった。

今年も来週ＰＥＴを受けに行く。

来年は、だれと来るのだろうか。

〈　了　〉